

全国最年少市長の鈴木直道・夕張市長が昨年四月の統一地方選で初当選してから一年が経過した。東京都職員から転身した三十一歳。「よくやっている」。市民の多くはこの一年を好意的に見ているようだ。

目に見える成果があつた訳ではない。人口は相変わらず減少し、一年間で三〇〇人以上が去り、一人割れは目前だ。二〇年以上にも及ぶ借金の返済期間の短縮を国や道に要請しているものの、何らメドはたっていない。

だが、夕張のプラスイメージは飛躍的にアップした。「財政破綻のまち」として取り上げられることが大半だつた夕張が、「全国最年少市長のまち」に変わった。

鈴木市長へのイベント参加依頼も道内外から相次いでいる。市内のイベントへの来場者も以前より増えた。対外アピール力は抜群なのだ。今年三月に企業進出を決めた東京の会社社長も、最後の決め手になったのは鈴木市長の存在だつたという。

◇ ◇  
ただし、不協和音もある。関係者によると、市職員からは「市長は何を考えているのかわからない」「裸の王様だ」「目立つところには喜んでいくが、我々とはあまり話もしない」などと不満の声が出ている。夕張市には副市長がいなくても影響し

## リーダーを支えよう

ているようだ。替わりに道と東京都から各一人が理事として派遣されている。理事二人は市長と職員との間をつなぐパイプ役も期待されていたが、その役割を十分に果たせていないとの指摘もある。「所詮、二年したら道庁や都庁に戻る人だから……」と冷めた目で見える市職員もいるという。

表向きの好印象とは裏腹に、鈴木市長は庁内を固めきれず、身内から足を引っ張られかねない状況と言える。

似たような状況は前市政でもあつた。財政破綻後初の市長選となつた二〇〇七年、夕張出身でタイヤ販売会社社長の藤倉肇氏が当選した。「会社の業績を上げた手腕を夕張再建に」との期待があつたが、藤倉氏は一期四年間で引退し、市議に転身した。

市長の報酬は年間約二五〇万円で、持ち出しも多かったという事情があつたようだが、産業廃棄物処理場問題や市立診療所を巡り、庁内での意見の食い違いもあり、「リーダーシップがない」などと批判が出ていたという。藤倉氏は思うような市政運営ができないまま、最後は「市長の座」を投げ出す形となつた。

◇ ◇  
足の引つ張り合いと言えば、ここ数年の国政でも同様だ。自民党政権時代もそうだったが、民主党が政権を取つた二〇〇九

年以降はさらにひどい。首相は次々と交代し、この六年間で六人が首相になつた。

多くの議員、政党は主義主張より、自らの権力保持や権力奪取のために行動しているように見える。最近の原子力規制庁の発足が大幅に遅れているのはその象徴だろう。3・11以降のフクシマの惨事に直面しながら、あれこれと議論をしている余裕はない。

リーダーを批判することは難しくない。だが、鈴木市政はわずか一年。しかも財政再建中でやれることは限られる。もう少し長い目で見てほしい。少なくとも四年間は鈴木市長を支える気構えが必要だ。

今後、夕張市役所内で「内輪もめ」が激化するのか。一日も早く三二二億円もの借金を返し、国の管理下から脱して、自主的な市政運営を成し遂げるのか。目先の利害にとらわれていては、本来の目標もかすんでしまう。鈴木市長批判より、「全国最年少市長」というメリットを活かすことが近道だろう。

藤倉氏、鈴木氏に次ぐ、「第三の市長」はもう出てこないと思う。夕張が一体となって再生の道を歩んで行けるのか。今がラストチャンスかもしれない。

〈洋〉